

ICF及びICF-CYを巡る国際的動向

—ICF北米協力センター会議、ICF-CY会議及びWHO国際分類ファミリー会議の概要を中心に—

徳 永 亜希雄 ・ 田 中 浩 二
(企画部) (九州大学大学院)

要旨：本稿では、本研究所の課題別研究「ICF児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究」に関する研究成果の公表と資料収集を目的として出席したICF北米協力センター会議、ICF-CY会議及びWHO国際分類ファミリー会議の概要を中心に、ICF及びICF-CYを巡る国際動向について報告した。

本課題別研究は、ICF—CYを教育の文脈でどう活用するかを検討するものではあるが、国際的に教育以外の分野も含めてICF—CY及びICF全体についての議論やその方向性について把握しておくことが大切であると考え。現在のICF及びICF-CYを巡る動向としては、①コーディングによるケースの評価への活用を検討する動き、②医療情報等のデータ化による整理及び管理への活用を検討する動き、③限定した項目のセット（コードセット）を検討する動き、④統計ツールとしての活用を検討する動き、⑤概念的枠組みを活用してケースの理解の支援を検討する動き、等がある。これまで本研究で整理してきた日本の教育におけるICF及びICF-CYの活用の動向について、上記の国際動向に照らして考えると、⑤概念的な枠組みの活用が中心になっていると認識される一方で、少しずつ①コーディングによるケースの評価への活用についても検討されつつある、と考えられる。今後も国際的な動向を把握しながら、国内外の関係機関や関係者等との協働を通して、日本の文化や教育の文脈・目的に沿った形でよりよいICF-CYの活用の方向性を検討していくことが重要だと考える。

キーワード：ICF ICF-CY 国際動向 教育

1 はじめに

ここでは、本研究所の課題別研究「ICF児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究」（以下、本研究）に関する研究成果の発表と資料収集を目的として出席した次の三つの会議の概要を中心に、ICF及びICF-CYを巡る国際動向について報告したい。

- ・第13回ICF北米協力センター会議、
- ・ICF-CY会議
- ・2007年WHO国際分類ファミリー会議

併せてそれらの動向を整理し、本研究との関係で、今後の教育におけるICF及びICF-CYについて考察を加えることを目的とする。

2 第13回ICF北米協力センター会議の概要

本会議には、本課題研究の関係者として、研究代表者の徳永亜希雄（筆者）と同研究協力者田中浩二（同）が出席した。以下にその概要を整理したい。

(1) 本会議の位置づけ

1) 名称

Annual North American Collaborating Center Conference on the ICF (ICF北米協力センター会議（仮訳）、通称NACC、以下、通称で標記)

2) 性格・特徴

アメリカ合衆国とカナダによる、WHOの国際分類ファミリーに関する北米協力センターによって毎年交互に両国で開催される、ICFに特化した会議である。両国内だけでなく、WHOや他国からも出席があり、ICFについて議論を行う国際会議となっている。日本からも毎年数名が参加している。

(2) 第13回NACCについて

1) テーマ

Sharing Knowledge Through the ICF

2) 期日・開催地

2007年6月5日～7日

アメリカ合衆国、ニューヨーク州、ナイアガラフォールズ

3) 概要

6月5日にプレカンファレンス、6月6日、7日に本会議がそれぞれ開催された。

プレカンファレンスでは、American Psychological Association（アメリカ心理学会（仮訳）、通称APA）のメンバーらによるワークショップが行われた。具体的には、事例を用いて、その事例から読み取れる様々な情報をICFの項目と評価点によって整理する（コーディング）ものであった。ここでの取り組みは、ICFの項目を直接用いてアセスメントをするのではなく、作業療法士等の専門職がそれぞれの観点でアセスメントをし終えた一定量の情報のコーディングによって情報を整理し直し、それらを共通言語として用いて関係職種間で情報共有しようとするものであった。

一方、本会議では、上記テーマのもと、3つの全体会と15のセッションで37件の口頭発表、16件のポスター発表があった。全体として、今年のテーマであるICFの共通言語としての可能性を探索する発表が各国から数多く報告され、議論が展開された。

全体会のテーマの一つとして、2006年10月のWHO国際分類ファミリー会議で承認されたICF-CYについて取り上げられた。ICF-CY Developments and Children's Classificationというテーマのもと、WHO ICF-CYワーキンググループメンバーによるICF-CYについての全体的な報告と共に、日本、スウェーデン、カタール等でのICF-CY活用動向について報告があった（写真1）。

なお、本会議の情報については、次のホームページに掲載されている。

<http://cirrie.buffalo.edu/icf/conference/index.html>

（3）報告した研究成果について

本会議では、ICF-CYに関する全体会及び分科会において、日本の特別支援教育におけるICF及びICF-CY活用について、本研究の取り組みを含めて報告した（写真1）。発表タイトルと報告者は以下の通りである。

（title）

Implementation of ICF and ICF-CY on Special Needs Education (SNE) in Japan

（Author）

Akio Tokunaga（筆者）, Ken Sasamoto, Susumui Oouchi, Ryouji Hagimoto, Kengo Nishimaki, MD, Masaihiro Watanabe

（National Institute of Special Needs Education, Japan）

Koji Tanaka, PhD（筆者）, (Kyusyu University / Noah Nursery School, Japan)



写真1 発表の様子

Rune J. Simeonsson PhD, (University of North Carolina at Chapel Hill, U.S.A.)

全国的なレベル子どもや教育の分野でICF/ICF-CYが活用されている例は他にないことから、発表後にICF-CYワーキンググループメンバーの一人からこれまでの取り組みについて賛辞を送られ、素直に嬉しく、今後の励みになるものとなった。

（4）本会議から得られた知見

ICFの利点には、共通言語としての機能があり、その機能を発揮させるための活用には様々な方法が考えられる。本会議でも共通言語としての機能を意識した研究報告が複数見られ、既存の抽象的な概念（例えば、社会改良や健康など）をICFの枠組みによって整理・構成して表現することでより具体化していく研究が進められていた。また、従来の研究に見られるような測定・評価の枠組みとしてICFコードを用いる研究も依然として多かった。その際、すべてのICFコードを用いるわけではなく、調査や研究の趣旨に照らして任意に抽出したICFコードで測定・評価を行っている。しかしながら抽出されるICFコードに関しては必ずしもコンセンサスが得られているとは断定できない場合もあり、上記の概念整理の枠組みとしての活用も含めて、ICFの1,424項目にのぼる項目から抽出すべき項目を選択する際の妥当性には課題が残されている。もちろんICFの項目すべてを用いること非効率的であり現実的ではないため、実際の活用においては収斂された項目群に括る必要があるが、その際の妥当性に関しては十分な配慮が要求されると考えられた。

なお、本研究は、今回の報告の連名発表者でもあるWHO ICF-CYワーキンググループのchair person、アメリカ合衆国ノースカロライナ大学Rune J. Simeonsson教授と密に情報交換をしながら進めてきた。本会議中においても、今後の研究の方向性について打ち合わせを行った（写真2）。



写真2 田中(左)とSimeonsson教授によるICF-CYの取り扱いに関する打ち合わせ

3 ICF-CY会議

本会議には、本研究の関係者としては、研究代表者徳永が出席した。また、日本からもう1名の参加者があった。以下にその概要を整理した。

(1) 本会議について

1) 会議の位置づけ

今回の会議は、ICF-CYの誕生を期して開催されたものである。会議の名称はA Common Language for Health of Children and Youthであり、名称がそのままテーマ性を帯びたものとなっていた。

2) 期日・開催地

2007年10月25,26日
イタリア・ベニス

3) 概要

WHOの関係職員、ICF-CY ワーキンググループメンバー7名中6名、海外から参加者、開催地の地方政府関係者、イタリア国内の一般参加者等であった。会議は、英語とイタリア語で行われ(同時通訳有り)、全体的にICF-CYの誕生を祝うような雰囲気があった。以下、日程に沿って整理したい。

10月24日(前日)

プレスリリース。配布された資料には、各国関係者からのコメントが寄せられており、アジアからの唯一のコメントとして本研究所小田理事長による次のようなコメントが

記載されている。

(原文)

The approach of focusing on how children and youth function physically, socially and mentally within the context of their development and environment has important implication for special education.

(日本語)

障害のある子どもたちの教育において、ICF-CYによって、子どもたちの生活について、発達や環境に関する背景も含めた視点から身体的、社会的、精神的な面それぞれに焦点を当て、アプローチをしていくということは重要な示唆となっている。

10月25日(初日)

関係者からの祝辞の後、WHOの職員及びICF-CYワーキンググループメンバーから、ICF-CYの必要性や検討経過、内容の詳細についてのプレゼンテーションが行われた。

10月26日(2日目)

午前中にHealth, Education, Rightに関する3つのワークショップが行われ、それぞれの会場で報告と議論が行われた。筆者は、Educationの分科会に参加した。1人15分程度の報告と質疑応答が行われた。筆者らによる報告内容は、後述の通りである。

午後は、各分科会から報告の後、障害のある当事者やWHOその他、様々な立場にある人によるラウンドテーブルがあった。本会議の情報は、次のホームページに掲載されている。

<http://www.who.int/classifications/network/conferenceICFCY/en/index.html>

終了後は、後述するWHO国際分類ファミリー会議に参加する各国関係者と共に、船とバスを乗り継ぎ、同会議開催地のトリエステへ移動した。

(2) 報告した研究成果について

本会議では、本研究の取り組みを含めた日本の特別支援教育におけるICF及びICF-CY活用動向及び今後の方向性と研究計画について報告した。発表タイトルと報告者は以下の通りである。

(Title)

Implementation and Future Strategies of ICF-CY for Special Needs Education (SNE) in Japan

(Author)

Akio Tokunaga (筆者), Ken Sasamoto, Susumui Oouchi, Ryouji Hagimoto, Kengo Nishimaki, MD, Masaihiro Watanabe

世界保健機関国際分類ファミリー

World Health Organization Family of International Classifications (WHO-FIC)

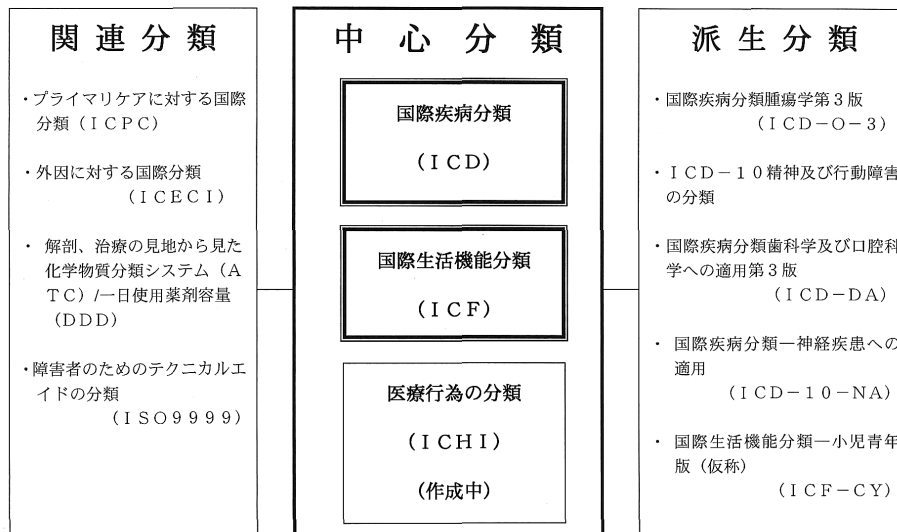


図1 WHO-FICの構造

(National Institute of Special Needs Education, Japan)

Rune J. Simeonsson PhD, (University of North Carolina at Chapel Hill, U.S.A.)

(3) 本会議から得られた知見等について

筆者は、これまでもICF-CYの検討作業にかかわってきたが、初日のICF-CYの全体像に関するまとまったプレゼンテーションにより、あらためてこれまでの情報を整理することができた。

また、2日目午前の教育に関する分科会では、すべての報告が終わった後、本分科会のスーパーバイザー的な位置づけであったICF-CYワーキンググループメンバーの一人・スイスのHollenweger氏から、「教育はChildren and Youthにとって重要な参加であると同時に環境因子でもある。その観点から、ICF-CYは教育に貢献できる」といったまとめがあった。このことは、日本の教育におけるICF-CYの位置づけや活用の方向性を検討するでも妥当な考え方だと考えられた。

一方、ICF-CY Work Group Cochair PersonであるイタリアのLeonardi氏から、ICF-CYに関する今後の展開として、Me too projectというものが紹介され、ICF-CYを活用した取組を共有し合う研究プロジェクトへの参加が呼びかけられた。筆者としても、このプロジェクトへの参加をとおして、これまで同様、各国関係者との連携のもとで研究活動を進めていく予定である。

4 WHO国際分類ファミリー会議

本会議には、ICF-CY会議から引き続き、本研究の関係者としては筆者の徳永が出席した。その他に、日本からは、WHOの国際分類ファミリー (WHO-FIC, 以下、同じ) を所掌する厚生労働省担当官やそれぞれの分類等に関連する医療関係者等が出席した。

なお、前述の二つの会議と異なり、本会議への出席にあたって、政府の承認を得る必要があり、筆者はICF-CYワーキンググループ関係者としての位置づけでこの2005年からの3年間出席している。

(1) 本会議の位置づけ

1) 名称

WHO Family of Classification Network Meeting (WHO国際分類ファミリー会議 (仮訳), 以下、WHO-FIC会議)

2) 性格・特徴

WHOの各種の国際分類の取り扱いについて検討するために、WHOと各国・各地域のWHO-FIC協力センター及びオブザーバー等の参加によって毎年開催されている会議である。

図1にあるとおり、ICFはWHO-FICの中心分類の一つであり、ICF-CYは派生分類の一つとして位置づけられている。一方、ICF及びICF-CYについて検討する組織は、図2にあるとおり、ICF全体については (Functioning and Disability Reference Group, 生活機能分類グループ, 通称: FDRG, 以下、通称で標記。) で中心的に検討しつつ、それぞれの委員会等でもICFについて検討される。例) ICFの

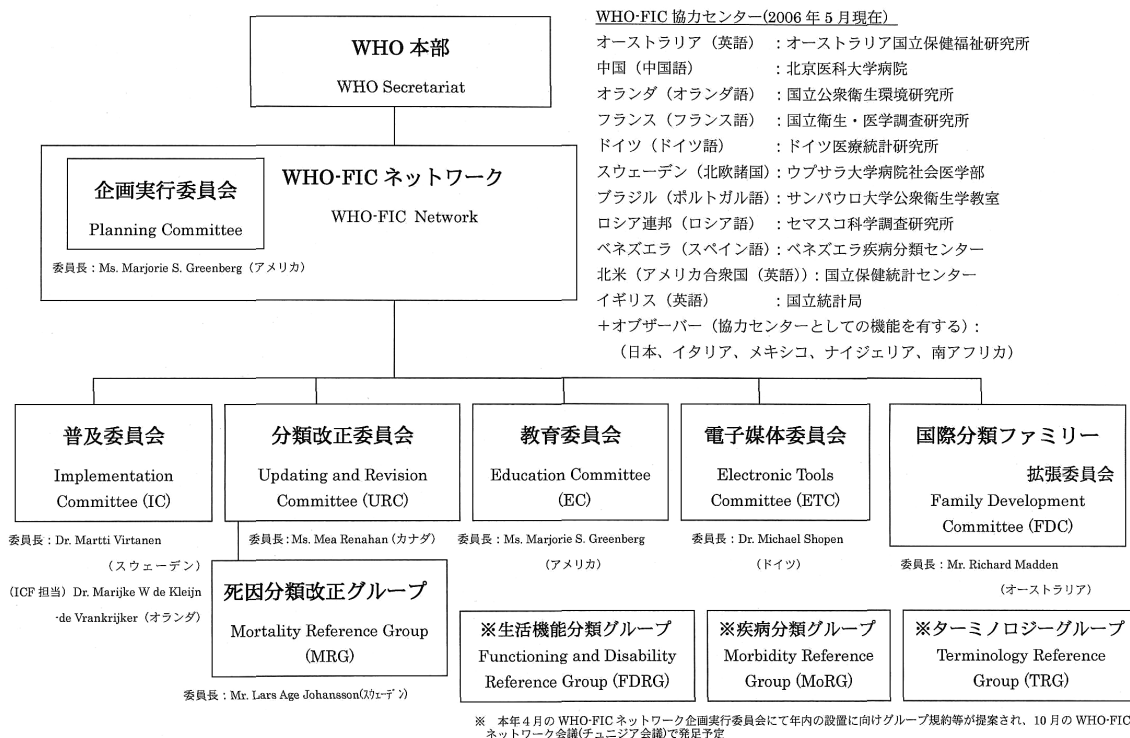


図2 WHO-FICの運営組織の構造

普及に関しては、Implementation Committee（普及委員会）で検討される。また、必要に応じてそれぞれの組織が協力し合って検討することもある。例）ICFの研修については、FDRG内のEducation Material（研修内容・方法等）小グループとEducational Committee（教育委員会）との協働で検討する等。

(2) 2007年WHO-FIC会議について

1) テーマ

Information Power: Owning and Sharing

2) 期日・開催地

2007年10月28日～11月3日

イタリア・トリエステ

3) 概要

本会議の概要は、既に社会保障審議会統計分科会生活機能分類専門委員会（以下、ICF専門委員会）において報告・公開されているが¹⁾、ここでは、ICF及び本研究にかかわる内容を中心に整理した。なお、本会議の情報は次のホームページに掲載されている。

<http://www.who.int/classifications/network/meeting2007/en/index.html>

ア 日程

10月27日（本会議前日）

FDRG等、各グループでの会議

10月28日

Planning Committee（企画委員会）や他のグループ、小グループ等での会議

10月29日～11月3日

この間、開・閉会式、それぞれの委員会・グループ等での議論、全体会での報告・議論、ポスター発表、ラウンドテーブル、今後に向けた計画検討、会議全体の評価と要旨作り等が行われた。ICF及びICF-CYについては、上記FDRGや各委員会等で取り上げられた。

イ ICF及びICF-CYに関する議論の概要

WHO-FIC全体の今年の大きな話題の一つは、ICD（疾病及び関連保健問題の国際統計分類：International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems）改訂に向けた動きであった。これまで、ICFについての議論は、ICFの枠組みの中で行われてきたが、今年は、ICF及びICF-CYについても、ICDとの連動やWHO-FIC全体の中での議論、WHO-FIC内での関係する複数の組織が協働する動き等が見られ始めた。例えば、ICF改正がICDと同様の手続きを踏んでWHO-FIC内で行われようとしていたり、前述のICFの研修についての検討のために複数の組織が協力して動いたりしている。

その他に、ICF及びICF-CYについては、次のような議論があった。

- ・ ICF-CY完成についての正式な報告
- ・ 各国のICFの普及状況と計画についての情報交換
- ・ 一定のまとまりの項目を用いるコードセットの検討
- ・ 保健専門職のための利用マニュアルの検討
- ・ 統計ツールとしてのICFの検討
- ・ FDRG内の8つのテーマ別小グループの内容（基準、改正、ICDとの調和、測定と活用、教育、倫理、環境因子、ターミーノロジー）

（3）報告した研究成果について

前述のICF-CY会議と同様の内容をポスター形式で報告した。

（4）本会議から得られた知見等

前述の通り、本研究の主眼であるICF-CYについては、ひとまず正式な完成報告について共有する程度であったが、親分類であるICFについては、改正に向けての具体的な議論やWHO-FIC全体の中で様々な議論が展開されるなど、大きな動きが出てきた。したがって、本研究においても、ICF及びICF-CYだけでなく、WHO-FICの全体の動きを踏まえた上で検討していく必要があるといえる。

また、一方向的に情報を収集するだけでなく、日本での成果を報告し、それらに基づいて議論をすると共に、各国関係者との今後の共同研究等について議論を重ねた。中でも、FDRGに関しては、今後もcontributor（協力者）として関与しながら研究活動をしていく予定である。

5 これらの会議の動向を踏まえて

本研究は、ICF-CYを教育の文脈でどう活用するかを検討するものではあるが、国際的に教育以外の分野も含めてICF-CY及びICF全体についての議論や方向性について把握しておくことが大切であると考ええる。これまで述べてきた国際的な動向を踏まえると、ICF-CYについては正式に誕生したばかりであるため、ICF-CYの活用動向やそれら活用した研究の動向についての情報はほとんどない。ICF-CYが親分類であるICFをベースにして項目の充実を図って作られたことを踏まえると、当面はICFの活動及び研究動向を整理しておく必要があると考える。以下、その概要を整理した。

（1）コーディングによるケースの評価への活用を検討する動き

前述のNACC報告のところで触れたコーディングについて

では、大まかにいうと2種類の方法がある。ひとつは、それぞれの専門職種等が独自に行った評価結果としてのエピソード等からICFのコードを拾い、整理していく方法である。例えば、ある特別支援学校で独自の評価内容や方法を用いて行った評価結果に関する記述から、ICFの項目を拾い上げ、評価点を付け、整理していく方法である。もうひとつは、最初からICFのコードを用いて評価する方法である。

いずれの方法もICFのコードという共通の尺度で整理するために、それらを共通言語として用いることができ、異なる職種間等の連携のためのツールになり得る。また、これらの方法では、指導や治療等の介入前と介入後に評価することで介入効果の判定が可能となる。

（2）医療情報等のデータ化による整理及び管理への活用を検討する動き

蓄積した患者に関する情報の中から、ICFのコードで情報を拾い直し、情報管理をするシステム等がこれにあたる。NACCでは電子化したシステムと医療情報の整理・管理にICFを活用しようとする報告の多さが目立った。

（3）限定した項目のセット（コードセット）を検討する動き

1,424項目にも及ぶICFの項目について取り扱うのは現実的ではない、という認識のもと、ケースの疾患やその他の文脈に合わせて必要と思われる項目のセット（コードセット）を作り、実践的に用いるというものである。本研究所在が翻訳したWHOの「ICFチェックリスト バージョン2.1a 臨床用フォーム」²⁾もこれにあたる。

ICFには幅広い視野から生活全般を捉えることができるという長所があるが、全ての項目の評価は実際には困難であるため、コードのセットの使用については、今後の実際の活用のための一つの有効な手段だと考えられる。

（4）統計ツールとしての活用を検討する動き

ICFのコードを用いて保健情報の比較等の統計に活用するものであり、ICFの目的に示されているものである³⁾。しかしながら、これまではあまり多く報告されておらず、今回のWHO-FICでの議論の中で取り上げられることが多くなってきた印象である。

（5）概念的枠組みを活用してケースの理解の支援を検討する動き

ICFの「構成要素間の相互作用の図」（図3）に表現された概念的枠組みをベースにしながら、環境因子等を含めて多面的にケースの生活の状況を理解し、そこで整理された

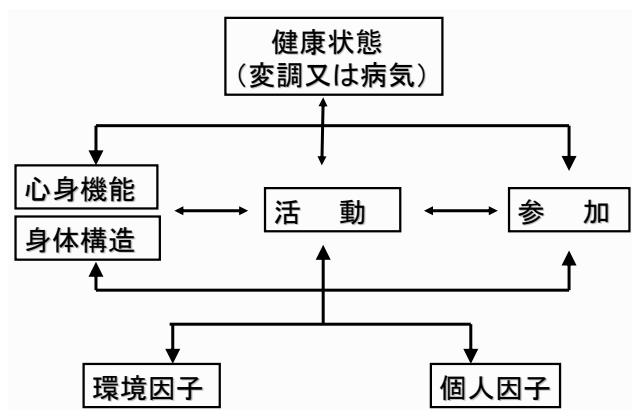


図3

情報に基づいて支援を試みるものである。これらの方法は、日本以外の国からの報告ではあまりない形ではあるが、少なくとも日本の教育分野での特徴的な活用の仕方として、以前から国際会議でも報告されている⁴⁾。

本研究においてこれまで整理してきた日本の教育でのICF及びICF-CYの活用を活用した取組の情報について、これらの会議から得た国際動向に照らして考えると、⑤概念的枠組みの活用が中心になっていると認識される。一方で、少しずつ①コーディングによるケースの評価への活用についても検討されつつある⁵⁾。

今後も、国際的な動向を把握しつつ、日本の文化や教育の文脈・目的に沿った形でよりよい活用の仕方を今後も検討していくことが重要であると考え。また、国内にとどまらず、ICF-CY会議で提案されたMe too Projectや

FDRGとの協働の中で、国際的な視野でさらに深めていく予定である。

他方、現在、ICF専門委員会において、翻訳を含めたICF-CYの国内への適用手続きについて議論されている。子どもの分野の専門家の意見を今後反映させていく、という同委員会での議論を踏まえると、教育におけるICF-CY活用を検討してきた本研究及び専門家集団としての本研究所としても、国内外での方向を踏まえた、実的な活用の方法についての知見を提供し、間接的に日本の教育にさらに貢献できるように進めていきたいと考える。

<引用資料>

- 1) 生活機能分類専門委員会webページ
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/s1214-7.html>
- 2) 独立行政法人国立特殊教育総合研究所・世界保健機関（WHO）編著、ICF活用の試みー障害のある子どもの支援を中心にー、ジアース教育新社、2005
- 3) 障害者福祉研究会編集、ICF 国際生活機能分類ー国際障害分類改定版ー、5,2002,
- 4) Akio TOKUNAGA,Yutaka SAKAI,Rune J. SIMEONSSON
Environmental Factors in Special Education Policy in Japan, 12th Annual North American Collaborating Center Conference on ICF, 2006
- 5) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所編著、ICF及びICF-CYの活用：試みから実践へー特別支援教育を中心にー、ジアース教育新社、2007

International Perspective Surrounding the ICF and ICF-CY

- Overview of the North American Collaborating Center Conference on ICF, ICF-CY Conference and WHO Family of International Classifications Network Meeting -

Akio Tokunaga

(Department of Policy and Planning)

Koji Tanaka

(Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University)

Summary

This paper reports on international perspective surrounding the ICF and ICF-CY by giving an overview of the Annual North American Collaborating Center Conference on ICF (NACC), ICF-CY Conference and WHO Family of International Classifications Network Meeting (WHO-FIC Network Meeting), which we attended for the purpose of collecting materials and presenting the results of research being conducted by the National Institute of Special Needs Education on the topic of “Developmental Research on the Use of ICF Children and Youth Version (ICF-CY) to Educational Policy.”

Understanding issues such as debate about the ICF-CY and ICF overall and the direction in which they are headed internationally, including the fields outside of education, is an important prerequisite to research on this topic, which examines the use of ICF-CY in an educational context.

The following trends surrounding ICF and ICF-CY are currently evident:

- (1) Examination of their usage in case assessments through coding,
- (2) Examination of their usage in the organization and management of medical and other information through data automation,
- (3) Examination of limited code sets,
- (4) Examination of their usage as a statistical tool,
- (5) Examination of their usage as conceptual frameworks for understanding and supporting cases.

A comparison of trends that this research has identified in the usage of ICF and ICF-CY in education in Japan with the above international trends indicates that, while ICF and ICF-CY are mainly recognized for their use as conceptual frameworks (number five above), their adoption in case assessments through coding (number one) is gradually also being examined. We conclude that it will be vital to continue to monitor these international trends and study better possible applications of ICF-CY in accordance with the culture of Japan and the educational context/objectives of our nation through collaboration with related parties and institutions in Japan and other countries.

Keywords: ICF, ICF-CY, International Perspective, Education